



神戸の観光案内（その4）

～文学に映る海・まち・山～

神戸大学経済経営研究所

特命講師 小代薫

「神戸は京都に比べて歴史が浅い」と、観光の話題ではよく言われる。確かに京都の神社仏閣群は素晴らしい。しかし、建物だけで街の歴史の厚みが決まるわけではない。神戸の海や山に目を向けると、開港以前から積み重ねられてきた歴史が見えてくる。

京都の人から「神戸は真夏でも風があって気持ちいい」と聞いたことがある。普段は当たり前前に感じている地勢や自然環境にも、街の魅力を考え直す手掛かりがある。

神戸の街の特徴は、そのまま地勢の特徴とも言える。地面を横から押し合う力で六甲山が持ち上がり、反対に押し下げられた部分が大阪湾となった。山上には比較的なだらかな地形が残り、明治期には日本初のゴルフコースが造られた。一方、山麓へと続く斜面には地中深くの岩が露出し、大きな高低差が滝を生んだ。

こうした巨岩や滝は古くから信仰の対象となり、数々の伝説を生み出した。六甲山は多くの修験者を受け入れる修行の山でもあった。山麓には、修験者の世話をしたことを起源に持つ寺が点在する。港の発展を支えた深い水深も、異人館街が形作られた海に迫る山麓も、神戸の歴史とは切り離せない。

筆者は、神戸の地域史と文学に造詣の深い神戸学院大学の谷口義子先生とともに、神戸の地勢や自然環境を描いた記述を文学作品から拾い出し、整理する作業に取り組んだ。対象は奈良時代から現代までの25作品。『万葉集』や『平家物語』から、谷崎潤一郎の

『細雪』、村上春樹の『風の歌を聴け』まで、時代も作風も異なる作品を通して、神戸の風景を見直す試みである。こうした記述を集める目的は、文学の舞台を紹介するだけでなく、神戸の地勢や自然環境を観光やまちづくりに生かすことにある。

登場する場所を数えると、布引の滝が8回、兵庫の津が7回、須磨が6回、和田岬と舞子がそれぞれ5回と続いた。さらに生田神社が4回、住吉が3回、六甲山、有馬温泉、明石海峡がそれぞれ2回。これだけで結論を出すことはできないが、海とまち、まちと山の「境界」に当たる場所が繰り返し取り上げられていることが興味深い。

人々の活動する場所に応じて、作品に描かれる境界にも新たな場所が加わっていく。また、近代の作品になると風景の描写が客観的で精緻になっていく傾向も見られた。文学に

は、単に場所の名前だけでなく、その時代の人がどこに立ち、何に目を向けたかという手掛かりが残されている。

神戸を訪れる際には、名所を一つずつ巡るだけでなく、作品に描かれた場所と、その風景を生んだ地形を重ねて歩いてみてはどうだろう。滝の落差や山肌の岩、海に迫る斜面にも、長い歴史を読み解く入り口がある。海からまちへ、まちから山へ。その境界をたどる散歩は、見慣れた神戸の風景に、もう一つの奥行きを与えてくれるはずである。